

明日を生きたい

ヒマラヤのふもとから

産だつた。原因は分からない。翌年の長女ジャヌキちゃん(11)も逆子だつた。この時は、妹が町の開業医の家でお手伝いをしてい

た。妹がこの医者に異変を知らせ、ようやくジャヌキちゃんが生まれた。3年後

おなかを痛めた赤ちゃん全員が無事に育つなんて、ここでは奇跡に近いのか。ネパール南西部・プトワル市のスラム街。土壁に茅ぶき屋根の家が、ぎっしりと建ち並ぶ。すえたにおいが鼻をつく。この一角に住む34歳のナルマヤ・タパさんは、産んだ4人のうち2人を失っていた。

20歳の時、初めての出産を家で迎えた。陣痛に耐え、待っていた子は逆子だつた。足がのぞく。家族らが足を引っ張った。頭が出てこない。1時間後、出てきた女兒は冷たくなつた。すぐ2人目を身ごもつた。男児。死

無事出産「神の木」に祈る母



の長男(8)は病院で出産した。かなりの出費だつた。なぜ、それまで病院に行かなかつたのか。「見られるのが恥ずかしかつたし、お金がなかつたから。でも、私が悪い」。ナルマヤさんは、自分を責め続けた。

自宅出産で2人の赤ちゃんを亡くしたが、病院での出産で新たな命を3人も得た母親は木の神、石の神への祈りも欠かせない—プトワル市近くの村で



隣のシタ・タパさん(50)は、産んだ9人のうち3人を亡くした。9年前まで山間部のグルミ郡にいた。医者はいない。2人を出産時に、1人は1歳で風しんで死んだ。

1年前、呼吸が苦しくなつた。熱もある。近所の人から「病院に行ったら

治るよ」と聞いた。行くとは熱はおさまつた。だがシタさんはその後、病院に行つてない。お金がないからだ。プトワル市から東へ車で30分ほど走つた村で、花模様のサリーをまとつたウマ・カラ・パンデさん(31)が木の周りを回つていた。幹の直径が1尺以上もある。1回、2回、3回……。

根元の丸石の前には目を通す。この木と石にかけては目を閉じる。この木と石には、神が宿つているという。亡くした子どもの霊を慰めるため、毎週土曜日、こうして祈る。ウマさんは5人を出産した。最初の2人は自宅で産んだが、生後間もなく死んだ。3回目の出産で、初めて遠くの病院に行つた。3年後に二男が、さらに3年後、三男が次々に病院で誕生した。

● 病院建設にご協力を

「目に見える援助」を実施するため、今年のキャンペーンは従来の国連機関などへの寄金に加え、ネパール現地で進められている子ども病院建設計画にも協力します。

救援金は、下記へ郵便振替が現金書留で送金いただくか、直接ご持参ください。〒530-51 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係(郵便振替・00970-9-12891)

兄弟そろって成長 奇跡に近く

文・連見 新也
写真・懸尾 公治